



無理・無駄のない授業を求めて

文学部 山田 忠司



1957年大阪生まれ。1981年神戸市外国語大学中国学科卒業後、住友商事(株)に入社。主に対中輸出貿易に従事。1990年同社退職後台湾において日本語教師(5年間)。1995年帰国後東京外国語大学大学院修士課程、神戸市外国語大学大学院博士課程に進学。1999年国立富山商船高専国際流通学科に奉職。2001年本学文学部中国語中国文学科に赴任。専門は中国語学(特に『紅樓夢』などの近代北京語文法)。(やまだ ただし)

ここで紹介するのは本学中文科学生にとって基幹科目と言うべき中国語文法・講読Ⅰの授業概要である。当然ながらほとんどの受講生にとって中国語はまったく未知の新しい外国語である。受講生35名という大所帯、限られた時間の中、目指す目標は高く、試行錯誤を繰り返しているというのが実態である。

0. はじめに

筆者が所属するのは「中国語中国文学科」である。他大学における類似学科は単に「中国文学科」と称するのが大半であるが、本学科において「中国語」の文字を冠することの意味は、いうまでもなく中国語習得もその目標として掲げられていることに他ならない。外国語の習得には多くの時間を要することは自明であるが、外国語学部中国語学科に比して圧倒的に少ない時間数(本学では必修の中国語授業として1年次、2年次にそれぞれ4コマを配している。外国語学部系では1～3年次にそれぞれ6コマ程度を配するのが一般的のようである。本授業の受講生は35名でこれも外国語トレーニングの場としては理想的なものとは言い難い)の中で、如何に「無理、無駄のない授業」を行うかは一大命題であろう。

1. 基本方針

1) 講義ではなく外国語のトレーニングの場であるとの認識の下、極力教員の説明の時間を減らし、受講生自身が活動(主に発声)する時間を確保する。そのためある程度の文法事項の単純化、例外事項の無視は容認する(習慣の集大成が文法である以上は例外的現象も少なくなく、それにこだわってはいは本質を見失う恐れがあるため)。それよりは中国語は易しく、その学習はおもしろいという印象を受講生に与えるように心がける。

2) 受講生が多様な学習活動を行うことで、90分の授業時間にメリハリをつけ、受講生を飽きさせないようにする。受講生の学習活動としては、課文斉読・独読、板書筆写、ロールプレイ、ペアワーク、課文筆写などである。

3) 中国語の特質に応じた理解の仕方を養うように心がける。英語とは異なり、中国語は

単語が分ち書きされず、句読点以外ではただ漢字がずらずらと並んでいるだけである。それゆえ中国語の理解では漢字と漢字の結びつき（ブロック）を理解することが必要となる。そのため早い段階から漢字はブロックを作り、単語→句→節→文と広がっていくという認識を深める必要がある。

4) 音声を離れた外国語習得はあり得ないとの観点からまず中国語の発音習得に重点を置く。しかし、教授者がNon-nativeであることに鑑み、T A (teaching assistant) の最大限の活用を目指す。発音に関してNon-nativeが教授する場合の最大の問題点はCritical error (危機的間違い) とNeglective error (無視しうる間違い) の峻別が難しいことにあると考える。ここで言うCritical error (危機的間違い) とはコミュニケーションに支障をきたす重大な間違いを指し、Neglective error (無視しうる間違い) とは間違っただけで、コミュニケーションには支障がない仔細な間違いを指す。Non-nativeが発音を教授した場合、それが間違いであるが故にNeglective errorの矯正に多くの時間と労力を費やす傾向にある。この点に関してnative speakerにわかってもらえるならば、それは最低限のハードルはクリアしたものとさえよう。そういう観点からT Aに発音指導してもらうのである。

2. T A (teaching assistant) の有効的活用に関して

本年度春学期、本学大学院中国人留学生(河南省 駐馬店市出身 女性)にT Aとして協力をお願いすることができた。主に担当いただいたのは

- ①テキスト本文の模範朗読
- ②学生個別の発音矯正
- ③日本語中訳ドリルにおける学生解答の添削
- ④ディクテーション時の問題朗読

もちろん中国語の肉声を聞けるというだけでもT Aの効用は大きいと言えるが、発音チェック、矯正にも大いに援助いただいた。発音については日本人共通の欠点がある他に各個人の苦手な発音というものも存在する。それはや

はり個別に矯正するしか方法がない。筆者はクラス(35名在籍)を二つに分け、筆者とT Aが分担し、学生の発音を矯正するという方法を採用した。

また、テキストにある日文中訳ドリルの答え合わせの際、学生が書いた中国語の添削に大いに力を発揮いただいた。学生が書いてくる中国語には時にその正否の判断に苦しむ場合がある。そのような場合にすぐネイティブチェックが受けられるのはありがたい。

お仕着せの会話練習ではなくて、自分の言いたいことを外国語で表現していくのが、会話力伸長の近道である。それで、理想は受講生に予めT Aに聞いてみたいことを用意させ、それを中国語でT Aに質問させ、T Aの返答の中の未習語彙を日本人教員が板書するなどの方法で補い、わずかずつでも中国語でコミュニケーションすることを体験させていくことである。しかしながら1年生前期の入門期であり、それは実現不可能であった。しかし、今回T Aと受講生に間に交遊関係も生まれ、授業評価アンケート中のコメントの中にもT Aに高評価があったことを述べておきたい。

T Aとのチーム・ティーチングの効率化については、今後も検討していきたい。

3. 暗唱について

筆者は外国語学習において暗唱の効用を否定するものではないが、入門期で発音の基礎が固まっていない段階においては有効ではないと思う。もちろん学生につきっきりで細かく発音をチェック、矯正しながら、暗唱させるのであれば別であるが、例えば自宅での課題として課文を覚えてこいと言うのは誤りを固定化する弊害があると考えている。



前回の授業で示された課題問題(日文中訳)に授業開始前に学生が取り組んでいるところ。